

継続調査による原子力発電に対する世論の測定(11) —2016年10月の調査結果—

Measurement of Public Opinion on Nuclear Power Generation through Replicated Opinion Surveys (11)

The results of a survey conducted in October, 2016

*北田淳子

(株)原子力安全システム研究所

1993年以來、原子力発電に関する世論の継続調査を実施している。2016年10月の最新の調査結果をふまえ、福島第一原子力発電所事故後の変化の推移と、2015年に政府が策定した「2030年の電源構成」の評価、再稼働についての司法判断の受け止め方などを報告する。

キーワード：原子力発電、継続調査、世論、再稼働、司法判断

1. はじめに

これまでに、2014年調査までの結果として、以下の内容を報告している。①福島事故後に原子力発電への世論は「現状維持」から「減らす」に大きく変化した。②電源選択基準が重大リスク重視に変化し、利用否定が30ポイント増えた。ただし、利用容認は5割を超えている。③原子力事故への不安感が大きく高まったが、時間経過に伴い低下傾向。④原子力発電所の長期停止に伴い、電気料金の上昇やCO₂排出量増加などの支障は意識されず、原子力発電の効用についての評価が低下傾向。⑤再稼働については、明確な反対が多数ではなく、「どちらともいえない」という態度保留が多い。

その後の動きとして、「2030年の原子力20～22%」が示された。2015年夏に川内1・2号機が、2016年夏に伊方3号機が再稼働したが、大部分は停止が続いている。高浜3号機は、2016年1月に再稼働したが、3月に再び仮処分が出されて運転を停止した。関西では、2015年に8.36%の電気料金再値上げがあり、FIT賦課金は、2014年度の標準家庭月額225円から2016年度は約3倍になった。

2. 調査概要

関西地区の18歳以上79歳以下男女を対象にランダムルート法（現地積上法）で抽出し、訪問留置き法で実施した。2015年10月に1022人、2016年10月に1008人から回答を得た。

3. 結果と考察

(1) **意識の動向**： 原子力発電利用態度は、「利用するのがよい」が8%、「利用やむをえない」が48%、「他の発電に頼る」が30%、「利用すべきでない」が14%で、2014年からほぼ変化がなかった。安全に関する認識にも変化がなく、原子力事故への不安感は一時的に低下していた。事故から5年を経過し関心の低下に伴い、意識が固定化していると考えられる。一部が再稼働したが、賛成は増えていなかった。選択肢の表現を変えると、「運転を再開してよいか再開すべきでないか考えると判断に迷う」が5割であった。再生可能エネルギーへの期待は、若干低下しているが、依然高かった。再エネのために許容する値上げ幅は1割程度と大きくない一方、FITの負担が重くても「どんどん導入する」が3割、「望まない」が2割、判断保留が5割で、いずれも変化はなかった。現状に対して特に負担感はないことがうかがえる。

(2) **2030年の電源構成の評価**： 「2030年の原子力20～22%」については、「多すぎる」が41%、「適切」が52%、「少なすぎる」が6%であった。「原発ゼロがよい」という規範には反対しない一方で、現実的判断が容認されていると考えられる。

(3) **司法判断と決定手続き**： 原子力発電所の安全性や運転の可否を裁判官が適切に「判断できる」が11%、「判断できない」が37%であった。原子力発電の利用が、安全審査の結果や政府のエネルギー政策とは別に、司法判断にゆだねられることを「望ましい」が14%、「望ましくない」が32%であった。いずれにも判断保留が多いが、司法判断によって原子力発電を止めることは支持されていないといえる。

原子力発電の今後についての最適な決定方法としては、政府委任が45%、参加型（国民投票、または市民参加の国民討議）が39%で、国会や司法判断を大きく上回った。原子力発電利用肯定層では政府委任が、利用否定層では参加型が多かった。国民討議を選好する層でも自らの参加には消極的であった。

参考文献

- 北田淳子(2013) 継続調査でみる原子力発電に対する世論—過去30年と福島第一原子力発電所事故後の変化—日本原子力学会和文論文誌12(3), 177-196.
北田淳子(2014) 人々の電源選択に関する意識の現状—福島第一原子力発電所事故から2年半後—, INSS JOURNAL, 21, p24-40.
北田淳子(2015) 再稼働への賛否と原子力発電についての認識—2014年のINSS継続調査から—, INSS JOURNAL, 22, 27-46.

*Atsuko Kitada